

因果関係と接続形式

タメニとカラ

木下 りか

大手前大学総合文化学部

kishita@otemae.ac.jp

1. はじめに

タメニには、「目的」と「原因理由」の用法がある。(1)は「目的」、(2)は「原因・理由」を表わす例である。

(1) 東京へ行くタメニお金をためた。(「目的」)

(2) 意地悪をしたタメニ、仕返しをされた。(「原因・理由」)

「原因理由」を表わすタメニは、次の(3)に示すようにカラで置き換えることができる。

(3) 意地悪をしたカラ、仕返しをされた。

本稿はカラとの比較により「原因・理由」を表わすタメニについて考察することを目的とする。

2. レベルの相違

タメニはカラとは異なり3つの概念領域 (Sweetser(1990)) のうち、内容領域の関係()しか表わせない。

Content domain (4) 強い風が吹いたタメニ/カラ旗が倒れた。

Epstemic domain (5) 旗が倒れた * タメニ/カラ強い風が吹いたにちがいない。

Speech-act domain (6) 雨が降ってきた * タメニ/カラ洗濯物をいれなさい。

3. 因果関係

3.1 関係の相違

内容領域の関係を表わすとき、先の例文(4)のように両形式とも使用可能な例があるいっぽう、次のようにタメニのみ不自然となる場合もある。

(7) 200 円のものを買って 500 円払ったカラ、おつりは 300 円だった。

(8)?? 200 円のものを買って 500 円払ったタメニ、おつりは 300 円だった。

タメニを用いた(8)のみが不自然なのはなぜか。これについて「PタメニQ」と「PカラQ」における、PとQの関係の相違という観点から考察を進める。両者とも「原因・理由」を表わすとされることから、その際、因果関係という概念を手がかりにする。

3.2 因果関係と必要条件

因果関係を、何かがあるを引き起こすことだと捉えた場合には、例文(4)の関係も例文(7)(8)の関係も、因果関係であると言える。

(9) 強い風が吹いた 旗が倒れた (例文(4)の関係)

(10) P「強い風が吹いたこと」が、Q「旗が倒れる」ということを引き起こした

(11) 200 円のものを買って 500 円払った おつりは 300 円だった (例文(7)(8)の関係)

(12) P「500 円払った」ことがQ「おつりは 300 円だった」を引き起こした

そこで「PがQを引き起こす」という概念を、PがQの成立に欠かせない条件であると明示化し、次のように捉えなおす。

(13) P (原因) は Q (結果) のその場合その状況における必要条件である。

これは(14)のように言い換えることができる。

(14) その場合その状況下では、P でなければ Q ではない⁽¹⁾。

このように考えれば例文(4)の関係は因果関係であるが、例文(7)(8)の関係は因果関係ではないとすることができる。

(15) 強い風が吹かなければ旗は倒れなかった。

(16) 200 円のものを買って 500 円払わなければおつりは 300 円ではなかった。

このうち、タメニで表示可能なのは(15)の関係のみである。したがってタメニは、因果関係(PはQの必要条件であること)を表わす形式だと考えることができる⁽²⁾。

3.3 十分条件と必要条件

原因理由文と条件文との関わりについて、坂原(1985:117)は「理由文の基底には条件文が存在する」「理由文も条件文の「同一の知識の2つの現われ方に過ぎない」と述べている。

条件文「PならばQ」はPがQを含意すること(PがQの十分条件であること)を表わす。「PタメニQ」が「PならばQ」と対応関係を持つ以上、検討しなければならないのは、PとQの関係と十分条件との関わりであろう。

すでに検討した必要条件に十分条件を加えてPとQとの関係を整理すると、次の4つの可能性が考えられる。

(17) (イ) PはQの必要条件だが十分条件ではない

(ロ) PはQの必要条件ではないが十分条件である

(ハ) PはQの必要条件でも十分条件でもない

(ニ) PはQの必要(かつ)十分条件である

前節で見た例文(4)の関係は、(イ)に相当する。PがQの必要条件となっていることはすでに(15)で見たとおりである。そして、次に示すようにPは必ずしもQを含意せず、したがってPはQの十分条件ではない。

(18) 強い風が吹いたからといって旗が倒れるとは限らない。

(イ)について、ほかの例としては、次の(19)(20)があげられる。いずれもタメニは容認される。

(19) 椅子に足がひっかかったタメニ/カラ、転んだ。

(20) 年をとったタメニ/カラ、足腰が弱くなった。

また、前節で見た例文(7)(8)の関係は(口)に相当する。PがQの必要条件ではないことはすでに(16)で見たとおりであるが、次に示すようにPはQを含意し、十分条件となっている。

(21) *200 円のものを買って 500 円払ったからといっておつりが 300 円だとは限らない。

(口) についての例としては(22)もあげられる。いずれもタメニは非文となる。

(22) 太郎は中学生だから/*のタメニ未成年だ。

3.4 タメニと必要十分条件

必要条件でも十分条件でもない(ハ)については、あえて論ずる必要がないかもしれない。タメニもカラも当然ながら、含意関係のない単なる継起関係を表示することはできない。

(23) *朝起きたタメニ/カラ、コーヒーを飲んだ。

では、必要十分条件となる(ニ)についてはどうか。次の例を見てみよう。

(24) 必要な単位を取得したカラ/*タメニ卒業した。

(25) *必要な単位を取得したからといって卒業できるとは限らない。(PはQの十分条件)

必要な単位を取得しなければ卒業できない。(PはQの必要条件)

(24)のタメニが不自然であることから、必要十分条件の場合、タメニが使えないかのように見える。しかし、「十分条件」「必要条件」というふたつの条件のうち「必要条件」が焦点化されれば、タメニの使用は容認されると考えられる。次の例では「必要な単位を取得していなかったことが理由で卒業できなかった伊藤さん」との対比によって、「必要な単位を取得しなければ卒業できない」ことがとりたてられている。

(26) 必要な単位を取得したタメニ、佐藤さんは無事卒業しましたが、伊藤さんはだめでした。

以上、3.3と3.4の考察から、タメニはPがQの必要条件であることを表わし、十分条件の有無については斟酌しない形式であると考えることができる。

4. 価値判断

「ために」によって引き起こされた事柄・事態はよくないことが多い(市川 1997:336)。

次の例文は、原因を表わすタメニの記述にあたり、森田(1980)のあげた例である⁽³⁾。

(27) 野球チームが優勝したために生徒たちは鼻が高い。

(28) 皆が努力したためにクラスの平均成績は学年の第一位に上がった。

(29) バスが遅れたために遅刻した。

(30) 貴様のために散々な目にあったんだぞ。

(31) ブラウン管を取り替えたために修理費が高かった。

(32) 教職課程の単位を落としたために留年した。

(33) 予習を怠ったために先生に叱られた。

(34) 夫が大酒飲みのために妻は苦勞する。

「PタメニQ」はPがQの必要条件であること、すなわち「PでなければQではない」ことを表わす。現実とは異なる「PでなければQではない」世界に関心を寄せるのは、典型的にはこれ

を望ましいと考える場合であろう。次にこれを望ましくないものと捉える(27)(28)のような場合である。このときは逆に、「PタメニQ」が望ましい世界となる。

5. おわりに

「PタメニQ」の表わす関係性に着目して考察を行った結果、タメニは因果関係、すなわちPがQの必要条件であることを表わすことが明らかになった。タメニの特徴については、「専ら焦点要素にのみ接続する」(今尾 1991)という指摘もある。今後の課題としては、言語事実もふまえさらに広くタメニの性質を捉えること、さらには、目的を表わすタメニを対象に含めて考察を進めることがあげられる。

注

- (1)因果関係と必要条件との関わりについての議論の基本は鈴木(2001)に負っている。因果関係と関連する議論ではないが前件が必要条件となる推論の存在については、今仁(1993:210)や李(2007)に指摘がある。
- (2)先行研究では、奥津(1984)「理由の形式副詞」、今尾(1991)「客観的接続機能を有し(中略)専ら焦点要素にのみ接続する」、中畠(1999)「現存の所以(原因・理由)」などとされている。
- (3)例文(28)(32)については、タメをタメニに変えた。例文の容認度は変わらないものと思われる。

参考文献

- 有田節子(2007)『日本語の条件文と時制節性』くろしお出版
- 市川保子(1997)『日本語用例文小辞典』凡人社
- 今仁生美(1993)「否定量化文を前件にもつ条件文について」益岡隆志編『日本語の条件文』くろしお出版 pp.203-222
- 今尾ゆき子(1991)「カラ、ノデ、タメ その選択条件をめぐって」『日本語学』10-12 明治書院 pp.78-89
- 于日平(1996)「「タメニ」の意味表出と構文的特徴 複文に見られる時間的關係と意志性について」『日本語と日本文学』22 pp.12-23
- 奥津敬一郎(1984)「続・形式副詞論 目的・理由の形式副詞」『現代言語学の課題』1 社会研究編 明治書院 pp.545-573
- 坂原茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会
- 鈴木義和(2001)「原因理由文について」『神戸大学文学部紀要』28 pp.83-101
- 中畠孝幸(1999)「目的を表す構文について ヨウニとタメニ」『甲南大学紀要』文学編 115 pp.18-29
- 李光赫(2007)「条件文の誘導推論をめぐる日中対照 前提条件と必須条件の視点から」『国語学研究』 pp.100-111
- Mackie (1974) *The Content of the Universe*, Oxford University Press.
- Salmon (1998) *Causality and Explanation*, Oxford University Press.
- Sweetser (1990) *From Etymology to Pragmatics*, Cambridge University Press.